

新学期

——いま私が当面していること——

津 守 真

自然環境の損壊を、人間的環境がどのくらい補うるものだろうか。これは、いま、私が当面している最大の課題のひとつである。

夏休みに、庭に接して工事前防護布が張られ、垣根とともに植木が移され、草叢が取り払われたときには、長年かかって作られた手づくりの環境が、現代の機械文明の前に、いかにほかないものかを感じ

させられ、つい気持が下向きになってしまった。しかし、秋になって子どもたちが来たときに、環境の変化の故に、子どもたちを荒れた気分にしたら大へんである。おとなたちはみんな、暑い夏の間、胃痛や頭痛をしながら、折衝し、考え、準備した。

九月の始め、二学期がはじまったときには四、五米の鉄板の防護壁に囲まれたものの、植木は再び移

植され、ジャングルジムや太鼓橋は取りはずして整地され、ともかくも、小ざっぱりと人の手のはいつた環境になった。そうすると、一時はどうなることかと思つた場所に、うるおいが感じられてくるのは不思議である。まもなく子どもたちが登校してくるということが、保育者のみでなく、工事の現場の人にも、たとえ仮設の期間でも人間味を加えた環境にしたという気を起させるものらしい。ひとりの保育者が云つたように、工事中の仮りの環境の中でも、保育には仮りの保育など、一日でもありはしない。

二期期の第一日目、子どもたちは、いつものように、かわりなく登校した。高くめぐらされたフェンス、植木の移植、ブランコの位置の移動など、子どもたちにも気付かれていることはあるのだろうが、それは行動にはあらわれず、いつもと同様に、先生

たちと実習生たちに迎えられて、遊びはじめた。

まだ真夏のように暑い日だったが、部屋を通り抜ける風は涼しく、子どもと落ちて腰をおろした。

三十四年前、私が大学を出て翌年、当時まだ珍しかった教育相談で、発達検査の結果、知恵おくれの診断をした幼児があった。その母親は、それではこの幼稚園にいれたら良いのかとたずねた。私はこたえることができないでいると、診断だけして、その先を考えない専門家は無責任ではないかと、夕方まで帰ろうとしなかった。私は母親のいうことはもつともだと思つた。それから一月後に障害幼児のための保育室を開設することになった。その後、私は大学で幼児保育の講座を担当することになったが、ひきつづき、非常勤の研究者として、この保育室のお世話をさせて頂いた。普通の幼児の保育も、障害児の保育も、幼児の生活をつくる保育者の保育行為は、根本においてかわることはない。そして、三十数年前に、小さな木造の保育室が建つたのは、現

在の場所とほぼ同じ位置だった。そのころは、一面に雑草に蔽われ、空が広々と見える場所であった。それから現在までの間に、この敷地に、いくつも鉄筋コンクリートの建物が建ち、いまや、ビルの谷間になろうとしている。

もしかしたら、日本の未来図の先駆かもしれない。

都市の真中で、障害をもった幼児の保育など可能なのだろうかとの懐疑も生じる。けれども、都市生活のただ中で、障害をもった幼児はふえつつある。都市環境の中で保育する道が見出せなかったら、どうすればよいのだろうか。

たとえ広い環境があっても、子どもを存分に生かす人間環境がなかったら、広さは意味をもたないだろう。

たとえビルの谷間の施設でも、人間的環境の豊かさによって、子どもの生きる空間は、自由で伸びやかなものにならないだろうか。人の手を加えること

によって、人間味のある自然環境を、少しでも作ることはできないだろうか。これは、いま、私共が否應なしに当面している課題である。その答えも明かでないままに。

九月の新学期の最初の日、Hは一番に登校した。後向きに歩いて、何十度も庭を往復する。目の横で後を見ているから、めったに障害物にぶつからない。母親は、久しぶりの学校で、Hは得意な後向き歩きで空間をたしかめているのでしようという。子どもたちが大勢こないうちに、ゆっくりと庭をたしかめられるように、早くつれて来たのだという。登校する時にも、それぞれの母親の配慮がある。神樹の木の高い枝が切られて、太陽が直射するようになった変化を、Hが気付いたかどうかは明瞭でない。

いつもとかわらずに生活しはじめた。

Rは、登校するとすぐに、庭の水道であそびはじめた。いつもとかわらぬ姿を見て、安堵した。短時間自分で自分から水遊びをきりあげて、位置の移動したシーソーにのって、長い間たのしんでいた。これは夏休みのあとの成長である。

まだ夏の延長で、暑い。水であそぶ子どもが何人もいる。庭には大きな水たまりができて、歩けない幼児も水たまりに向って突進する。水しぶきの中にとびはねる子ども、ホースの口をしっかりと握って、水圧をコントロールしながら、自分で制御できるもののあることで満足を感じているらしい子ども、たまった水の中に泥をこねてあそぶ子どもなど、狭い庭でも、水あそびは多様な活動を生み出す。

Yは、防護壁の鉄板のわきに張られた金網から、彼の手の中で作られた独特のストローの輪を、金網の外に向って落す。いつもの行為であるが、新しい

金網と防護壁の風景は、彼にも、とくべつの印象を与えているのだろうか。体は大きい、ことばを話さないYと、話題をつくって対等に話しかけると、親しい表情を寄せてきて、内容のあるつきあいになる。

(愛育養護学校)

